



RemembranceDay に想う

校長 本田 哲朗

令和になって初めての師走を迎えた。ここまでを振り返って願うのは、令和が災害にみまわれることなく続いて欲しいという事である。万事に際し、基本的に〇〇ファーストは如何なものかと考えるが、敢えて許されるのは自然ファーストだろう。この所の災害を自然からの逆襲とは思わないまでも、背後に自然への畏敬を軽んじて来た傲慢さと無関係ではないはずである。

自然のキャパシティーを超えた開発や、意にも留めない温暖化政策など、小学生（猿と書きたい位です…）でも解る事が実際になおざりにされている感が否めない。



REMEMBRANCE
DAY

11月に特進コースの引率で3年ぶりにカナダ・バンクーバー(BC)を訪ねた。前回は成田を発つときアメリカの大統領選の行方が決まっていなかったのだが、現地に着いたら〇〇ファーストを公約とした候補者が予想に反し当選していた。ところでBCは森の中にある。そして、いつ訪れても美しく、住んでみたい都市の5位以内に必ず名を連ねている。今回も特進コースのプログラムに従い、提携校 St パトリックリージョナル校を訪問した。校長先生は替わっていたが、前回に引き続きジョン先生には大変お世話になった。この時期の訪問で特筆したい一つは“リメンバランスデー”への参加が許される事である。歴史の浅いカナダは、先の二つの世界大戦と朝鮮戦

争に参戦しているが、その戦没者を慰霊する儀式である。赤色のポピー(血を表す)のバッチを胸に付け、生徒主体で1時間にも及ぶ、平和への希求が厳粛に執り行われる。国を挙げては、11月11日午前11時11分に喪に服す…との事で、この日は、数少ない国民の休日になっている。戻るが、こう言う事を大切にする文化に触れ、果たして本校の生徒達は、何を想い、学び、考えたのだろうか。

話題は変わるが、一貫2期生は東洋と西洋の接点、トルコ・イスタンブールでの研修旅行が実施された唯一の学年であった。折しも、訪問先の St アポロバ・カレッジ(高校)では、建国の父アタチュルク(ケマル・パシャ)の命日に喪に服す儀式への参列が許可された。州知事も参列する学校行事で、生徒の劇・合唱・詩の朗読等と…国を挙げてこの事を大切にしていることが十分感じられる厳粛さがあった。ちなみに、この日(11月10日に9時5分にアタチュルクが没)はこの時間に、国の総ての都市では一斉にサイレンを鳴らし、総ての船舶も汽笛を鳴らす。また、走っている自動車も止まり、働いている人々は動作を止めて胸に手を当て黙とうを捧げるとの事である。

こうしてみると、日本にはこういった精神性を求める機会が本当にあるのだろうかと考えてしまう。自分の自覚不足を棚に上げての事だが、建国記念日があり、終戦記念日や、天皇誕生日…等の休日が無い訳ではないが、カナダ・トルコに比べ、どうしても弱い感じが払しょく出来ない。そうであるならば、年が明けると9回目になるが、これまで以上に東日本震災の日である3月11日14時46分に喪に服するのと合わせ、“普通に生活出来る事のありがたさ”に感謝し、自分自身を省みる日にしようと思った次第である。